



## 初のバラの新品種「愛知1号」を開発

(平成27年9月品種登録出願公表)

愛知県は、バラの生産が全国第1位で、出荷量は全国の約2割を占めています。

農業総合試験場では、生産者からの強い要望により、県独自の新品種「愛知1号」を開発しました。生産者団体の協力のもと開発した愛知県として初となるバラ品種です。

「愛知1号」は最もポピュラーな花形

である剣弁高芯(けんべんこうしん)咲きのスタンダードタイプの切り花品種です。花弁数が多く花にボリューム感があり、ゆっくりと開花するため長く観賞できます。茎にトゲが少なく、販売店や消費者が扱いやすいのも特長です。

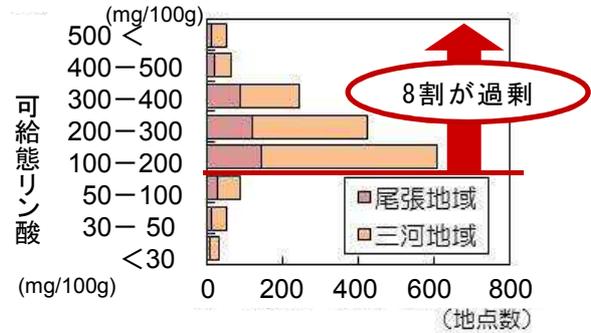
今後、県内の赤バラ主力品種として普及することが期待されます。

(園芸研究部)

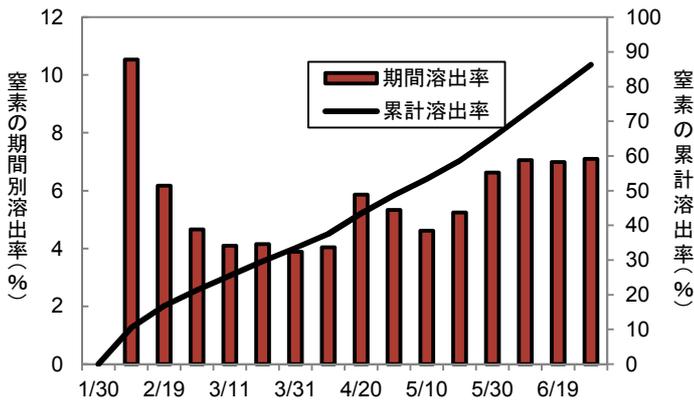
## リン酸が蓄積したほ場での半促成トマト栽培における全量基肥栽培技術を開発



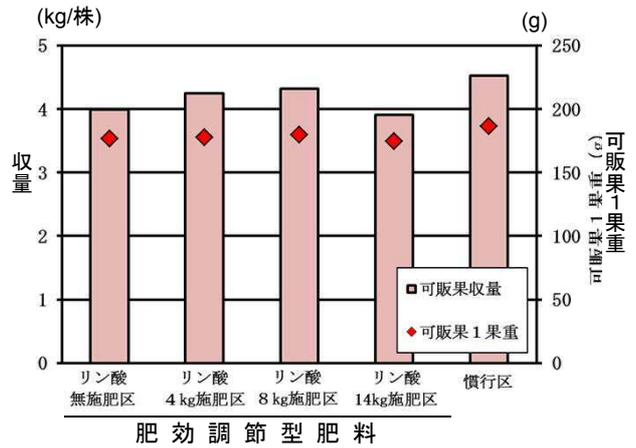
施設栽培のトマト



県内施設土壌における  
可給態リン酸の頻度分布



開発した肥料の窒素溶出率の推移



トマト収量および1果重

リン酸無施肥区：基肥 N：P：K=20：0：26  
 慣行区：基肥 N：P：K=14：14：14  
 追肥 N：P：K=10：0：12

本研究は、JAあいち経済連との共同研究により実施しました。

県内の施設園芸産地では、土壌中に可給態リン酸が過剰に蓄積したほ場が約8割を占めています。そこで、リン酸が蓄積した半促成トマトほ場に適した肥料及び省力施肥技術を開発しました。

この肥料は、成分にリン酸を含まず、土壌中に蓄積したリン酸を利用します。窒素に被覆尿素を用いることで、窒素施

用量を慣行より約2割削減でき、作型に適した溶出パターンの全量基肥タイプとしたことで、追肥労力も軽減できます。

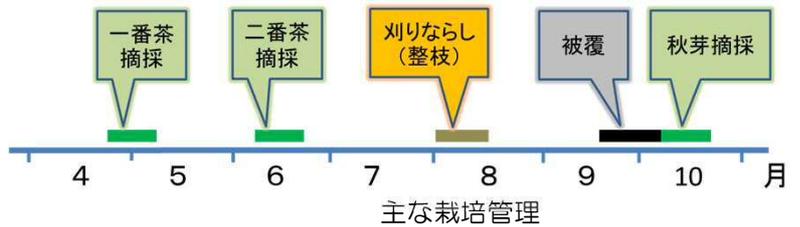
開発した肥料を用いたトマトの生育及び収量は慣行栽培とほぼ同等で、リン酸を無施用で栽培した場合、肥料費は約3割削減できます。肥料の利用にあたっては、土壌診断を実施してください。

(園芸研究部)

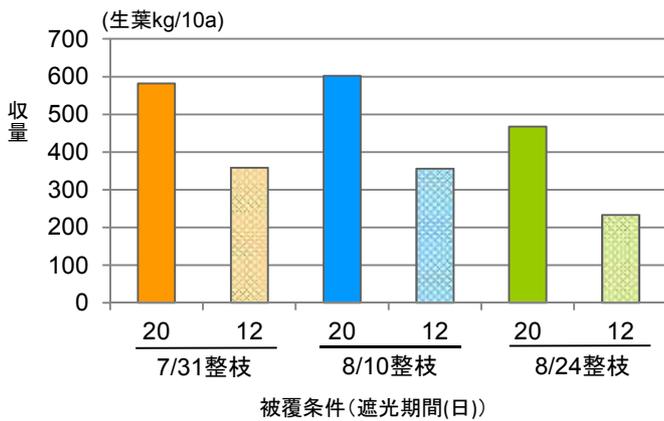
## 秋芽を利用した食品加工用てん茶の生産技術を開発



秋芽の直接被覆栽培



秋芽で製造したてん茶



整枝時期と秋芽の収量

遮光開始：9月18日 摘採日：20日遮光 10月8日  
被覆資材の遮光率：85% 12日遮光 9月30日

被覆時の生育とてん茶の品質

整枝日	被覆期間	被覆時開葉数	外観*	化学成分
				全窒素 (%・DW)
7/31	20	4.5	13.5	4.4
	12	4.5	15.5	4.8
8/10	20	4.3	15.5	4.5
	12	4.3	18.0	4.8
8/24	20	2.6	19.0	4.7
	12	2.6	20.0	5.7

\*20点満点の相対評価

本研究は、磯田園(株)との共同研究により実施しました。

せん茶価格の低迷により、生産農家の経営が不安定になっています。一方、抹茶の原料となるてん茶は、食品加工用としても需要があります。そこで、秋に刈り捨てられる秋芽を利用したてん茶の生産法を検討しました。

夏季の刈りならし(整枝)を8月上旬に実施すると、秋芽の生育が良好で、多

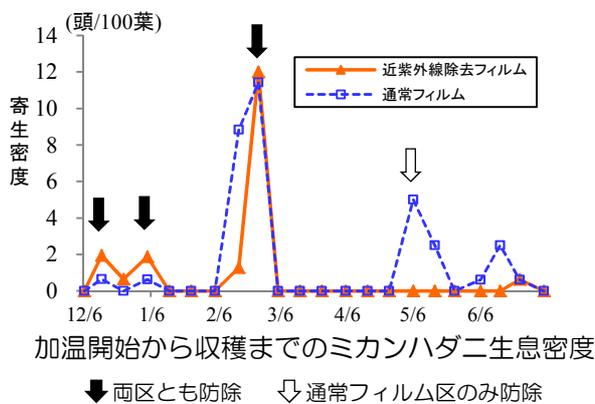
収となりました。また、遮光率85%の資材で、20日間秋芽を被覆することにより、12日間被覆に比べて増収しました。翌年の一番茶の生育に影響はありませんでした。

秋芽で製造したてん茶は食品加工用として十分な品質で、利用が期待されます。(東三河農業研究所)

# 研究トピックス

## 近紫外線除去フィルムでハウスミカンのハダニ防除回数を削減

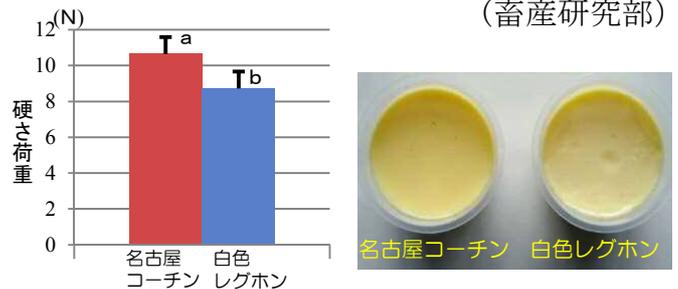
ハウスを近紫外線除去フィルムで全面被覆することにより、ハダニの増殖が抑えられ、加温開始から収穫までの間に1回、収穫から次期加温開始までの間に年により1回から2回のハダニ防除を削減できました。また、果実品質や収量に対しては違いは認められませんでした。(園芸研究部)



## 名古屋コーチン卵の加工特性

名古屋コーチン卵を原料とした製菓への加工特性について明らかにしました。作製した製菓(プリン等)は、白色レグホン卵を使用した場合に比べて、硬さや色の濃さが増し、さらに、粘性が高く型崩れしにくい特性を有することが明らかとなりました。

(畜産研究部)



卵の種類とプリンの硬さ (硬さ荷重)

卵の種類とプリンの色

※ab異符号間に有意差あり (P<0.05)

本研究は、あいち産業科学技術総合センターと(株)菓宗庵との共同研究で実施しました。

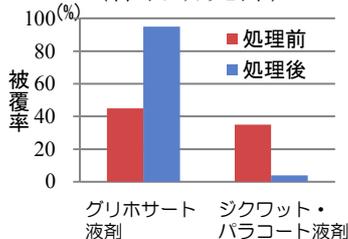
## 水田畦畔におけるグリホサート抵抗性ネズミムギの防除体系を開発

西三河地域ではグリホサート抵抗性ネズミムギが発生し、畦畔雑草の管理作業の増加が問題となっています。現地水田畦畔での試験の結果、ジクワット・パラコート液剤を秋冬期(10月又は12月)と春期(4月)の2回処理するとネズミムギの防除効果が最も高くなりました。今後もより効果の高い除草体系について研究を進めます。(作物研究部)



ネズミムギの様子

※グリホサート液剤散布後、抵抗性ではないネズミムギが枯れているが(中央)、抵抗性ネズミムギは枯れていない(右)



処理前と2回処理後のネズミムギ被覆率の変化

※被覆率が高いほどネズミムギの残草量が多い(6月)

本研究は、(公財)日本植物調節剤研究協会「植物調節剤の研究開発事業」で実施しました。

## もち柔らかさが持続する水稻糯米系統「愛知糯126号」の実証栽培を開始

糯米を使った和菓子類は、硬くなりやすくおいしく食べられる期間が短いのが課題です。そこで、デンプン構造を改良し、柔らかさが持続する水稻糯米系統「愛知糯126号」を開発しました。柔らかい糯米品種として知られる「ヒメノモチ」や「ハクチョウモチ」に比べて「愛知糯126号」の柔らかさは高く保持されます。今年度から稲沢市で現地実証栽培を行っています。



(山間農業研究所)

餅つき1日後に吊り下げた餅

本研究は、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業(26096C)」で実施しました。

### 研究短報第116号

編集・発行 愛知県農業総合試験場

〒480-1193 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-1

TEL 0561-62-0085 内線322 (企画普及部)

FAX 0561-63-0815

<http://www.pref.aichi.jp/nososi/>